

エドワード・ホッパー作《線路脇の家》
—「アメリカ的」特質と母の投影

山田 隆行 (早稲田大学)

1925年、アメリカ人画家エドワード・ホッパー(1882-1967)は《線路脇の家》を制作した。制作当時より高い評価を得た本作品は現在、「ホッパー芸術の成熟」を示す作品として認識され、文明の自然への侵入、或いは線路に象徴される「近代」とヴィクトリア様式の家に象徴される「過去」との衝突、その結果としての近代社会における人間の疎外や孤独の象徴として解釈されている。一方で、本作品がヒッチコックの映画『サイコ』(1960年)の靈感源の一つとなった事実は先行研究で頻繁に取り上げられており、また本作品に漂う「無気味さ」に焦点を当てた論考も試みられている。このような先行研究では、しかしながら、《線路脇の家》に対する制作当時の評価や、画家の問題意識に対する言及がほとんど見られない。これに対して本発表では、本作品が1930年にニューヨーク近代美術館初のパーマネント・コレクションとして収蔵された事実から論考を始め、当時の批評を手がかりとして、まず本作品に付与された「アメリカ的」という同時代的意義を明らかにしたい。

《線路脇の家》を美術館に寄贈したステイブン・クラークは、その理由として本作品が何よりも「アメリカ的」であったからだと述べている。先行研究で看過されるこの「アメリカ的」な要素とは、まずその主題選択に見出せる。当時の社会的要請に従うかたちでホッパーは大衆の希求する過去のアメリカを主題として選んでいるのである。一方で、建物の堅固な形態、水平と垂直を基本とした厳格な構図といった形式にもまた、ヴィクトリアニズムまたはピューリタニズムという伝統的なアメリカの価値観が見出されていたことがわかる。そして、他のどの作品よりも本作品の形式にはこの「アメリカ的」な特質が反映されているのである。

このような事実は、ホッパーが当時のアメリカで再評価されていたピューリタニズムの精神を内面化し、造形表現に転化したことも意味するだろう。そして、ここでさらに指摘したいことは、ホッパーのピューリタニズムには母の存在が密接に関連しており、実際に《線路脇の家》には母の面影が重なり合わされていると考えられる点である。そもそもホッパーの作品には、建物を人物に見立てて一種の肖像画のように描いたものがある。本作品と同年に制作された水彩画《ワシントン・スクエア近くのスカイライン》では、背の高いビルに画家自身の姿が投影されており、この点を考慮すると、《線路脇の家》に母の姿が投影されている可能性は十分にあるといえるだろう。そして、ピューリタニズムと結び付くその厳格な形式や見上げる視点、10年ほど前に描かれた母親の肖像との類似性などがこの事実を裏付けると考えられるのである。

以上を通して本発表では《線路脇の家》に対する再解釈を試みることを目的とする。